

植 物

1. 選定・評価方法の概要

絶滅や絶滅が危惧される種の選定と評価は、原則として環境省版レッドリストカテゴリー(2007)の定量的要件を用いた。

検討対象種は、東京都に野生する植物全種の一覧を含む『東京都の野生生物種目録 1998 年版』を基礎に、伊豆諸島 436 種(前回(1998 年版)の掲載種は 306 種)、小笠原諸島 196 種(同 121 種)とした。これらの種について、有識者や地元の団体・個人等の協力を得て株数や減少率等に関する情報の収集を行い、このデータをコンピュータ上で解析しカテゴリーを判定した。

2. 選定・評価結果の概要

検討対象種について、1 種ずつ評価を行った結果、本書に掲載される絶滅または絶滅が危惧される種として選定されたのは伊豆諸島で 349 種、小笠原諸島で 168 種で、その数は、前回(1998 年)の調査での選定に比べてそれぞれ 43 種、47 種増加した。

種数の増加は、主に各種の開発による自然環境の攪乱と破壊が 1998 年以降も進行し、生育場所の環境の劣化によっている。また盗掘やノヤギ(野生化したヤギ)による食害の影響もある。温暖化などの自然環境自体の変化が、絶滅やその危惧の増大の原因と考えられるケースは見出せなかった。副次的ではあるが、環境省基準の採用によって前回とは異なった評価を行ったことも選定種数の増加をもたらしている。また、現地情報が前回に比べ格段に増加し、絶滅に瀕している現状を明らかにしたことも選定種数の増加に関係している。

こうした評価方法の客観性の向上と現地情報の増加にみる絶滅危惧種への関心の高まりは、前回調査に比べ絶滅や絶滅危惧種に関する情報の精度と信頼度を大幅に高めている。現地情報の増加には、植物愛好家や各種団体によって行われてきた自発的な各島あるいは小地域ごとの克明な植物相調査が大きく寄与していることを記しておく。

今回新たに伊豆諸島でオナモミが「絶滅」と判定され、都の島しょ部における植物の絶滅(EX)は 4 種になった。

都の島しょ部は大きく、伊豆諸島と小笠原諸島に分かれ、その植物相は異なる。伊豆諸島の植物相は本土側の伊豆半島や三浦半島などと共通する種が多く産するが、小笠原諸島の植物相は他地域との類縁性が低く固有性が高い。伊豆諸島では無人島を除き、古くから人間活動が活発に行われ、自然植生の多くにも人為が及ぶ。小笠原諸島でも父島や母島など大きな島では人間活動が植生に多大な影響を及ぼしており、また、父島などでは野生化したノヤギによる食害が植生に影響を与えてきた。絶滅が危惧されるムニンタツナミソウ、シマウツボなどの種は食害が個体数の減少をもたらす最大の要因となっているが、近年、ノヤギ排除が進み、回復してきている例もある。

小笠原諸島の南端を占める火山列島の北硫黄島と南硫黄島はともに無人島であるが、比較的起源の新しい火山島である。山頂部分の標高は 800m 以上におよび、雲霧帯となり、雲霧林が発達する。南硫黄島は原生自然環境保全地域に指定され、生物相が保護される。両島とも第四紀に誕生した起源の新しい島であるにもかかわらず、進化速度が速いヘゴ属やヒメウラボシ属、シュスラン属には、実際に、エダウチムニンヘゴ、ナガバコウラボシ、ナンカイシュスランなどに固有種があることは注目されよう。

海洋島に共通して発達が見られるキク科の低木種からなるスカレシア型低木林*1は、日本では小笠原諸島のみに見られる低木林である。この低木林にはワダンノキをはじめ数多くの固有種があり、希少性が極めて高い。この種を含め小笠原諸島には進化速度が遅い木本属での固有種が多く見られる。これは小笠原諸島の植物相の起源の古さを示唆するものであろう。これは草本性の

固有種が多い伊豆諸島と根本的に異なる点である。

*1 スカレシア型低木林：木化したキク科植物からなる小低木群落で、ガラパゴス諸島の一斉更新をするスカレシア林が名高い。多くは直立した茎をもち、葉は茎の上部に集まってつく。

(大場 秀章)

マツバラン

Psilotum nudum

マツバラン科

伊豆諸島

EN

環境省

NT

【形態・生態】

常緑性シダ。根や葉がなく、二叉分枝する茎のみからなる。地上部の高さは10～14cm程度。木生シダの樹幹(不定根の部分)に好んで着生するが、地上や岩上に生育することもある。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州、南西諸島;世界の熱帯・亜熱帯

【伊豆諸島における生育環境】

へゴなどの樹幹に着生するほか、石垣の隙間など人工的な環境にも生育する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

観賞用植物としても知られるが、野生の株が園芸目的で採取される可能性は低いと考えられる。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1968; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
9	2	3	1	0	1

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
1	3	0	7	1	1

判定基準

ACD



(執筆: 海老原淳)

ミズスギ

Lycopodium cernuum

ヒカゲノカズラ科

伊豆諸島

NT

環境省

【形態・生態】

常緑性シダ。日当たりの良い場所を好む。直立茎の高さは50cmを超えることがある。伊豆諸島には類似したヒカゲノカズラも分布するが、本種は孢子嚢胞が下向きにつく点で区別できる。

【分布の概要】

伊豆諸島、小笠原諸島、本州、四国、九州、南西諸島;世界の熱帯・亜熱帯

【伊豆諸島における生育環境】

日当たりの良い崖や斜面に生育する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

法面の整備などによって生育環境が失われるおそれがあるので、注意することが望ましい。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1968; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
1	0	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

協議による



(執筆: 海老原淳)

スギラン

Lycopodium cryptomerinum

ヒカゲノカズラ科

伊豆諸島

DD

環境省

VU

【形態・生態】

常緑性シダ。主に樹上に着生し、茎が上向きに伸びるが、大きくなると垂れ下がることもある。茎の長さは 30cm を超えることがある。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道（東部）、本州、四国、九州；済州島、台湾、インド

【伊豆諸島における生育環境】

1 箇所でタブノキの樹上に、ヒモランと共に着生することが報告されている。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

珍しい種であることから、園芸目的や愛好家による採取に注意することが望ましい。

【関連文献】

岩槻邦男，1992；星野義延ら，1995。

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

協議による



(執筆：海老原淳)

ナンカクラン

Lycopodium hamiltonii

ヒカゲノカズラ科

伊豆諸島

CR

環境省

【形態・生態】

常緑性シダ。主に樹上に着生し、垂れ下がるが多い。先端近くでは小葉の間に黄色の孢子嚢をつける。茎の長さは 20 ～ 40cm を超えることがある。

【分布の概要】

伊豆諸島、小笠原諸島、本州、四国、九州、南西諸島；台湾、中国、東南アジア

【伊豆諸島における生育環境】

常緑樹林内で、樹幹に着生する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

園芸目的や愛好家による採取、また、伐採などによる自生地周辺の乾燥化に注意することが望ましい。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1968; 岩槻邦男，1992。

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	1	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

D



(執筆：海老原淳)

ヒモラン

Lycopodium sieboldii

ヒカゲノカズラ科

伊豆諸島

CR

環境省

EN

【形態・生態】

常緑性シダ。樹上や岩上に着生し、垂れ下がる。茎の長さは20～50cm。葉は鱗片状で小さく、針葉樹を思わせる形態になる。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州、南西諸島；済州島、台湾、中国

【伊豆諸島における生育環境】

1箇所ですぎノキの樹上に、スギランと共に着生することが報告されている。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

珍しい種であることから園芸目的や愛好家による採取に注意することが望ましい。

【関連文献】

岩槻邦男, 1992; 星野義延ら, 1995.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
1	0	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

D



(執筆: 海老原淳)

コウツシマクラマゴケ

Selaginella doederleinii var. *opaca*

イワヒバ科

伊豆諸島

NT

環境省

NT

【形態・生態】

常緑性シダ。茎は地上を長く這う。林下の斜面などに群生する。オニクラマゴケの変種で、葉が黄緑色で光沢がない点などで区別が可能とされている。伊豆諸島のオニクラマゴケは全て本変種にあたると考えられるが、アジアに広域分布するオニクラマゴケの中で本変種だけを分けることが妥当かどうか検討を要する。

【分布の概要】

伊豆諸島

【伊豆諸島における生育環境】

林下の斜面などに群生する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

特段の脅威は存在しないと思われる。なお、伊豆諸島固有とされる本分類群の実体については、さらに研究が必要である。

【関連文献】

芹沢俊介, 1982.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	1	1	2	2	6

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	6	0	0

判定基準

E



(執筆: 海老原淳)

カタヒバ

Selaginella involvens

イワヒバ科

伊豆諸島

VU

環境省

【形態・生態】

常緑性シダ。主に岩上生で、茎は匍匐し、小葉が多数集まったものは長さは10～25cmの葉状のまとまりを構成する。類似種として、温室からの逸出種であるイヌカタヒバがあり、カタヒバとは無性芽をつけることで区別できる。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州、南西諸島；東アジア、東南アジア

【伊豆諸島における生育環境】

やや乾いた岩の上に着生する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

島しょ部では、生育適地が限られるため稀少であると考えられるが、特段の脅威は存在しないと思われる。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1968; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
1	1	1	1	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

D



(執筆: 海老原淳)

イワヒバ

Selaginella tamariscina

イワヒバ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

常緑性シダ。根が集合して最大20cm程度の高さにまで立ち上がり、幹のような格好になる。日当たりの良い岩上などに生育する。乾燥すると葉を巻き込んだ状態で過ごす。

【分布の概要】

伊豆諸島、小笠原諸島、北海道、本州、四国、九州、南西諸島；東アジアから東南アジア

【伊豆諸島における生育環境】

不明であるが、他地域と同様に日当たりの良い岩上などに生育すると考えられる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1960年代に御蔵島から報告されたが、標本は確認されていない。また、現在の生育状況については情報が得られていない。そのため、分布や生育の状況を確認することが望まれる。

【関連文献】

里見信生・丸山尚敏, 1962; Jotani, Y. & H. Ohba, 1968.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

協議による



(執筆: 海老原淳)

シチトウハナワラビ ※備考 (p. 213)

Botrychium atrovirens

ハナヤスリ科

伊豆諸島

CR

環境省

【形態・生態】

冬緑性または常緑性シダ。根茎は直立し、1年に1(～数)枚の葉を地上に出す。林床などに生育。葉の高さは約50cm。オオハナワラビに比べて、葉の鋸歯が鈍いことで区別できるが、両種間の雑種であるゴジシカハナワラビも知られる。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生育環境】

主要な島ほぼ全てに見られ、樹林の林床に生育する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

種の特徴が十分に認識されていないが、実際には個体数はかなり多く、詳細な調査を行うことによってランクが下がる可能性がある。

【関連文献】

Sahashi, N., 1979; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

協議による



(執筆: 海老原淳・佐橋紀男)

ホウライハナワラビ ※備考 (p. 213)

Botrychium formosanum

ハナヤスリ科

伊豆諸島

CR

環境省

NT

【形態・生態】

常緑性シダ。根茎は直立し、1年に1～2枚の葉を地上に出す。やや湿った林床などに生育する。葉の高さは15～60cm。孢子葉は栄養葉とほぼ同じくらいの長さである。

【分布の概要】

南西諸島; 台湾、中国、ヒマラヤ

【伊豆諸島における生育環境】

不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

伐採などによる樹林の改変が最大の脅威である。樹林の維持が保全上特に重要である。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1968; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

D



(執筆: 大場秀章)

ゴジンカハナワラビ ※備考 (p. 213)

Botrychium japonicum var. *silvicola*

ハナヤスリ科

伊豆諸島

CR

環境省

【形態・生態】

冬緑性シダ。根茎は直立し、1年に1(～数)枚の葉を地上に出す。林床などに生育。葉の高さは22～60cm。オオハナワラビとシチトウハナワラビの雑種であり、前者に比べて葉質が厚く、後者に比べて鋸歯が鋭いことで区別できる。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州

【伊豆諸島における生育環境】

二次林の林床に生育する。母種と混生する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

伊豆諸島ではオオハナワラビとシチトウハナワラビの混生する大島でのみ見られる。個体数は少なめで、野生化したキョンによる被食も大いに懸念される。なお、ハナワラビ属では同レベルの倍数体間の雑種では、正常な孢子が形成される例が知られる。両親種がともに6倍体の本種でも正常な孢子が観察されており、さらに研究を行う必要がある。

【関連文献】

Sahashi, N., 1983; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

協議による

No image

(執筆者: 海老原淳・佐橋紀男)

アカハナワラビ

Botrychium nipponicum

ハナヤスリ科

伊豆諸島

VU

環境省

【形態・生態】

冬緑性シダ。根茎は直立し、1年に1(～数)枚の葉を地上に出す。林床などに生育。葉の高さは20～50cm。葉縁の鋭い鋸歯はオオハナワラビに似るが、冬期に葉が紅変する。

【分布の概要】

伊豆諸島(北部)、本州(宮城以南)、四国、九州; 朝鮮半島、中国

【伊豆諸島における生育環境】

林床に生育する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

伊豆諸島北部ではある程度の個体数が見られるが、開発などによる影響を受ける可能性があり、大島では野生化したキョンによる被食も懸念される。

【関連文献】

岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	1	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

D



(執筆者: 海老原淳・佐橋紀男)

アカフユノハナワラビ ※備考 (p.213)

Botrychium pseudoternatum

ハナヤスリ科

伊豆諸島

CR

環境省

【形態・生態】

冬緑性シダ。根茎は直立し、1年に1(～数)枚の葉を地上に出し、林床などに生育する。葉の形態はフユノハナワラビに似て、混生することもあるが、本種は冬期に葉が紅変する。フユノハナワラビとアカハナワラビの雑種である可能性も指摘されているが、さらに検討を要する。

【分布の概要】

伊豆諸島(北部)、本州、四国

【伊豆諸島における生育環境】

二次林の林床に生育する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

伊豆諸島北部ではある程度の個体数が見られるが、開発などによる影響を受ける可能性があり、大島では野生化したキョンによる被食も懸念される。

【関連文献】

Sahashi, N., 1983; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

協議による



(執筆: 海老原淳・佐橋紀男)

ミドリハナワラビ

Botrychium triangularifolium

ハナヤスリ科

伊豆諸島

CR

環境省

VU

【形態・生態】

冬緑性シダ。根茎は直立し、1年に1(～数)枚の葉を地上に出す。葉の高さは25～45cm。林床などに生育する。アカハナワラビに近縁な種であるが、冬期に葉が紅変せず、羽片の先端がよりとがる傾向がある。

【分布の概要】

伊豆諸島

【伊豆諸島における生育環境】

二次林やツバキ林、竹林の林床に生育する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

大島の固有種であるが、島内ではある程度の個体数が見られる。ただし、開発などによる影響や野生化したキョンによる被食が懸念される。

【関連文献】

Sahashi, N., 1983; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	1	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

E



(執筆: 海老原淳・佐橋紀男)

ナツノハナワラビ

Botrychium virginianum

ハナヤスリ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

夏緑性シダ。根茎は直立し、1年に1(～数)枚の葉を地上に出す。葉の高さは25～70cm。林床や林縁に生育する。もう1種の夏緑性種としてナガホノナツノハナワラビがあるが、伊豆諸島では記録されていない。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州；北半球の温帯、中南米

【伊豆諸島における生育環境】

1954年に利島で採集された標本が唯一の分布記録であり、以降確認されていない。ツバキ林内に生育していたとされる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

詳細な調査を継続することによって、再発見される可能性は残されている。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1968; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

協議による



(執筆者：海老原淳・佐橋紀男)

サクラジマハナヤスリ

Ophioglossum kawamurae

ハナヤスリ科

伊豆諸島

EN

環境省

EN

【形態・生態】

夏緑性または常緑性シダ。根茎は短く直立し、ハナヤスリ属としては例外的に栄養葉が発達せず、孢子葉のみから構成される。葉の高さは3～5(～10)cm。

【分布の概要】

伊豆諸島、九州(桜島)

【伊豆諸島における生育環境】

溶岩の裸地にわずかに生育する。他のハナヤスリ類(チャボハナヤスリ、ハマハナヤスリ)と混生する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

基準産地の鹿児島桜島では絶滅したと考えられており、伊豆諸島が現在唯一の産地である。愛好家による採取に注意が必要であるとともに、将来の火山活動活発化も考慮に入れた生育域外での系統保存の研究も必要である。

【関連文献】

Sahashi, N., 1980; 勝山輝男ら, 2011.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	1	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	1	0	0

判定基準

E+ACD



(執筆者：海老原淳・佐橋紀男)

チャボハナヤスリ

Ophioglossum parvum

ハナヤスリ科

伊豆諸島

EN

環境省

VU

【形態・生態】

夏緑性シダ。根茎は短く直立し、数枚の葉を地上に出す。葉の高さは最大でも約 7cm。他の日本産ハナヤスリ属に比べ全体が小型で、孢子葉と栄養葉の共通柄は 1cm 以下と短い。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州（静岡、三重）

【伊豆諸島における生育環境】

溶岩の裸地にわずかに生育する。他のハナヤスリ類（サクラジマハナヤスリ、ハマハナヤスリ）と混生する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

特段目立つ植物ではないが、分布域が局限されるため、愛好家による採取や将来予想される火山活動による影響への配慮が必要である。

【関連文献】

Nishida, M. & S. Kurita, 1980; 勝山輝男ら, 2011.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	1	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	1	0	0

判定基準

E+ACD



(執筆: 海老原淳・佐橋紀男)

コヒロハハナヤスリ

Ophioglossum petiolatum

ハナヤスリ科

伊豆諸島

EN

環境省

【形態・生態】

夏緑性シダ。根茎は短く直立し、1年に1～数枚の葉を地上に出す。葉の高さは8～25cm。近縁種とは栄養葉の形態（柄の長さ、形状）を指標に区別されることが多いが、正確な同定のためには孢子形態の観察が必要なことがある。

【分布の概要】

伊豆諸島、小笠原諸島、本州（東北中部以南）、四国、九州、南西諸島；世界の熱帯から温帯

【伊豆諸島における生育環境】

日当たりの良い砂地などに群生あるいは点々と生育する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

見逃されやすい植物であるため、現在のところやや厳しい判定 (EN) となっている。詳細な調査が行われればランクが下がる可能性がある。特段の生存上の脅威は存在しないと思われる。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1968; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	2	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	1	0	2	0	1

判定基準

E



© 寺尾博

(執筆: 海老原淳・佐橋紀男)

ハマハナヤスリ

Ophioglossum thermale

ハナヤスリ科

伊豆諸島

EN

環境省

【形態・生態】

夏緑性シダ。根茎は短く直立し、1年に1～数枚の葉を地上に出す。葉の高さは(5～)7～20cm。栄養葉の柄は不明瞭。栄養葉が基部の近くで幅広になるものを変種コハナヤスリとして分けることもあるが、区別は困難である。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州、南西諸島；東アジア、ミクロネシア

【伊豆諸島における生育環境】

日当たりの良い砂地などに群生あるいは点々と生育する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

見逃されやすい植物であるため、現在のところやや厳しい判定 (EN) となっている。詳細な調査が行われればランクは下がる可能性がある。特段の生存上の脅威は存在しないと思われる。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1968; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	1	1	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	1	0	0

判定基準

E+ACD



(執筆者：海老原淳・佐橋紀男)

リュウビンタイ

Angiopteris lygodiiifolia

リュウビンタイ科

伊豆諸島

EN

環境省

【形態・生態】

常緑性シダ。地上生で根茎は塊状。葉は長さは3mに達する。リュウビンタイ科は主に熱帯・亜熱帯性で、伊豆諸島では本種のみが見られる。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州、南西諸島；台湾

【伊豆諸島における生育環境】

伊豆諸島南部の、暗く湿った林床に生育する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

園芸目的の採取や、自生地の乾燥化に注意することが望ましい。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1968; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	2	0	2	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	1	1	2	0	1

判定基準

ACD



(執筆者：海老原淳)

ヒメハイホラゴケ

Crepidomanes amabile

コケシノブ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

常緑性シダ。根茎は長く匍匐する。葉身は長さ4～7cm。暗く湿った岩上などに生育する。

【分布の概要】

北海道、本州、九州（北部）

【伊豆諸島における生育環境】

不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

伊豆諸島の一部の島しょでは小型のハイホラゴケ類が見られるが、最新の見解ではそれらはヒメハイホラゴケではなく、ハイホラゴケに同定される植物である。分布や生育の状況を確認することが望まれる。

【関連文献】

Ebihara, A., S. Matsumoto & M. Ito, 2009; Ebihara, A, 2009.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

協議による



(執筆: 海老原淳)

ツルホラゴケ ※備考 (p. 213)

Crepidomanes auriculatum

コケシノブ科

伊豆諸島

CR

環境省

【形態・生態】

常緑性シダ。湿潤な林内に生育し、初期の根茎は地上から生じるが、長く伸びて、樹幹や岩などによじ登る。葉身は長さ20～30cm。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州、南西諸島；アジアの熱帯・亜熱帯

【伊豆諸島における生育環境】

湿潤で暗い樹林内で、樹幹や岩に茎がよじ登って生育する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

本科の植物は全般的に自生地の乾燥化の影響を受けやすい。良好な樹林環境を保全することが望ましい。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1968; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

協議による



(執筆: 海老原淳)

オオコケシノブ

Hymenophyllum badium

コケシノブ科

伊豆諸島

EN

環境省

【形態・生態】

常緑性シダ。湿潤な林内に生育し、根茎は岩や樹幹上を長く這う。葉柄基部まで翼がつく型はオニコケシノブと呼ばれて区別されることもあるが、伊豆諸島には狭義のオオコケシノブのみが知られる。葉身は長さ(5～)10～13(～25)cm。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州、南西諸島(屋久島・奄美群島); アジアの熱帯から温帯

【伊豆諸島における生育環境】

伊豆諸島における生育環境についての情報は得られていないが、湿潤な林内で、岩または樹上に着生していると思われる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

本科の植物は全般的に自生地の乾燥化の影響を受けやすい。良好な樹林環境を保全することが望ましい。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1968; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	1	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	1	0	0	0

判定基準

E+ACD



(執筆: 海老原淳)

キヨスミコケシノブ

Hymenophyllum oligosorum

コケシノブ科

伊豆諸島

CR

環境省

【形態・生態】

常緑性シダ。根茎は長く這い、樹幹に着生して、マット状の群落を形成することが多い。スギの巨木の樹幹に特異的に生育する。葉身は長さ2～4cm。コウヤコケシノブに似るが、葉は全縁。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州、南西諸島(屋久島); 東アジア

【伊豆諸島における生育環境】

伊豆諸島での生育環境についての詳細情報はないが、スギの巨木の樹幹に着生しているものと推定される。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

本科の植物は全般的に自生地の乾燥化の影響を受けやすい。良好な樹林環境を保全することが望ましい。

【関連文献】

岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
2	0	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

D



(執筆: 海老原淳)

コケシノブ

Hymenophyllum wrightii

コケシノブ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

常緑性シダ。空中湿度の高い林内で、根茎を岩や樹幹上に長く匍匐させて着生する。マット状の群落を形成することが多い。葉身は長さ2～5cm。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州；東アジア、カナダ

【伊豆諸島における生育環境】

日当たりが良く、霧のかかりやすい岩の隙間にわずかに生育している。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

自生地は保護地区内であるため、大きな脅威はないが、集団の状態を継続的に確認していく必要がある。

【関連文献】

岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

協議による



© 寺尾博

(執筆: 海老原淳)

ヘゴ

Cyathea spinulosa

ヘゴ科

伊豆諸島

EN

環境省

【形態・生態】

常緑性の木生シダ。幹の高さは4m以上になる。葉身の長さは2mを超えることもある。日本産のヘゴ科植物としては最も北に到達する種で、八丈島の群落は「北限自生地」として天然記念物に指定されている(ただし、実際の北限自生地は紀伊半島である)。

【分布の概要】

伊豆諸島、小笠原諸島、本州、四国、九州、南西諸島；アジアの熱帯・亜熱帯

【伊豆諸島における生育環境】

林内、あるいは林縁に高さ数mの個体が群生する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

野生の個体群には特段の脅威はないが、一部地域で山林に植栽された個体があり、野生個体と混同しないように配慮することが望ましい。また、同じヘゴ科のヒカゲヘゴが植栽されて、逸出している場所もあり、注意が必要である。

【関連文献】

岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	1	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	1	0	0

判定基準

E+ACD



(執筆: 海老原淳)

コバノイシカグマ

Dennstaedtia scabra

コバノイシカグマ科

伊豆諸島

CR

環境省

【形態・生態】

常緑性シダ。林床に生育し、根茎は地中を長く這う。葉身は長さ 20 ～ 60cm。葉に毛が少ない型は品種ウスゲコバノイシカグマとして区別されることもあるが、伊豆諸島には基準品種のみが知られる。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州（東北中部以南）、四国、九州、南西諸島（屋久島）；東アジア、東南アジア

【伊豆諸島における生育環境】

林床に生育する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

西日本では普通に見られる植物だが、東日本では比較的稀で、伊豆諸島では一地域でのみ知られる。また、生育状況は継続的に確認する必要があるが、特段の脅威は存在しないと考えられる。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1969; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
1	0	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

D



© 寺尾博

(執筆者：海老原淳)

セイトカイワヒメワラビ ※備考 (p. 213)

Hypolepis alpina

コバノイシカグマ科

伊豆諸島

CR

環境省

【形態・生態】

常緑性シダ。根茎は長く地中を這い、やや日当たりの良い開けた場所を好む。葉身は長さ 70 ～ 100cm。イワヒメワラビに似るが、葉柄や葉軸が赤褐色を帯びる。粘毛があるため、生時には葉に粘りがある。

【分布の概要】

伊豆諸島、小笠原諸島、本州、四国、九州、南西諸島；台湾、東南アジア

【伊豆諸島における生育環境】

川沿いの日当たりの良い環境に生育すると報告されている。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

不安定な立地を好む種であるため、国内各地で自生地が減少している。伊豆諸島でも現在の生育状況については情報がなく、詳細な調査が望まれる。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1969; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

協議による

No image

(執筆者：海老原淳)

クジャクフモトシダ

Microlepia marginata var. *bipinnata*

コバノイシカグマ科

伊豆諸島

CR

環境省

【形態・生態】

常緑性シダ。やや乾いた林床に生育する。根茎は地中を這い、葉柄下部とともに茶褐色の毛がある。葉身は長さ 30 ～ 60cm で、羽片の切れ込みには変化がある。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州；台湾、中国

【伊豆諸島における生育環境】

樹林の林床に生育する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

山林の改変や植林地の管理放棄による日照不足が生育上の主な脅威となる。特に本変種は栄養繁殖により個体や集団が維持されていると推定されるので、山林や植林地全体の保全や適切な草刈りなどの林床管理が望ましい。

【関連文献】

岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	2	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	2	0	0	0

判定基準

ACD



(執筆: 大場秀章)

フモトカグマ ※備考 (p. 213)

Microlepia pseudostrigosa

コバノイシカグマ科

伊豆諸島

CR

環境省

【形態・生態】

常緑性シダ。林床に生育し、根茎は地中を這う。葉身は長さ 30 ～ 60cm。クジャクフモトシダ (フモトシダとイシカグマの雑種) に似るが、本種は正常孢子を形成し、羽片基部の小羽片は完全に独立する。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州 (関東南部、静岡、愛知)；朝鮮半島、東南アジア

【伊豆諸島における生育環境】

伊豆諸島での生育環境については情報が得られていない。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

現在の生育状況については情報が得られていない。火山活動による影響が懸念され、詳細な調査が望まれる。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1969; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

協議による



(執筆: 海老原淳)

サイゴクホングウシダ

Lindsaea japonica

ホングウシダ科

伊豆諸島

EN

環境省

【形態・生態】

常緑性シダ。溪流沿いの岩に着生して群生する。葉身は長さ2～7(～9)cm。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州、南西諸島；東アジア

【伊豆諸島における生育環境】

日当たりの悪い河川沿いの岩の上に着生する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

伊豆諸島には大きな河川がないため、本種の自生地は限られる。特段の脅威は存在しないと考えられる。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1969; 岩槻邦男, 1992.



(執筆者：海老原淳)

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	0	1	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	1	0	0

判定基準

E

シノブ

Davallia mariesii

シノブ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

夏緑性シダ。根茎は長く匍匐し、褐色の鱗片に密に覆われる。主に落葉樹の樹幹や樹上に着生する。葉身は長さ10～20cm。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道（渡島）、本州、四国、九州、南西諸島；東アジア

【伊豆諸島における生育環境】

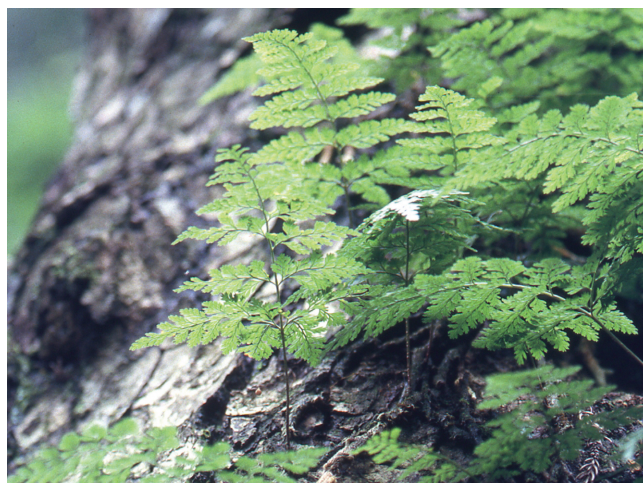
不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

利島に記録はあるが、確実な生育の証拠は確認できず、現在の生育状況は不明である。詳細な調査が望まれる。

【関連文献】

岩槻邦男, 1992.



(執筆者：海老原淳)

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

協議による

ハコネシダ ※備考 (p. 213)

Adiantum monochlamys

ハウライシダ科

伊豆諸島

CR

環境省

【形態・生態】

常緑性シダ。空中湿度が高い場所で岩に着生し、根茎は短く這う。葉身は長さ 10 ～ 26cm。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州；東アジア

【伊豆諸島における生育環境】

過去には流れに沿った岩に着生しているのが確認されており、標本も存在するが、生育環境の変化によって最近では確認されていないという。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

得られた情報を総合すると、既に絶滅している可能性もあるが、詳細な調査、情報収集を行う必要がある。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1969; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

協議による



(執筆: 海老原淳)

クジャクシダ ※備考 (p. 213)

Adiantum pedatum

ハウライシダ科

伊豆諸島

CR

環境省

【形態・生態】

夏緑性シダ。冷温帯の林床や林縁に見られ、根茎は短く這う。鳥足状に分枝する葉型が大変特徴的で区別しやすい。葉身は長さ 15 ～ 25cm。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州；アジアの温帯、北アメリカ

【伊豆諸島における生育環境】

不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

周北極要素で分布域の広い種であるが、日本国内に限ってみても染色体レベルの変異が見られることが知られている。分布の末端に位置する伊豆諸島の集団については、早急に詳細な調査を行って状況を把握することが望まれる。ただし、Jotani & Ohba(1969) は、伊豆諸島産が植栽である可能性も否定できないと述べている。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1969; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

協議による



(執筆: 海老原淳)

オオタニワタリ ※備考 (p. 213)

Asplenium antiquum

チャセンシダ科

伊豆諸島

NT

環境省

VU

【形態・生態】

常緑性シダ。単葉の葉を鳥の巣状に叢生させ、主に樹幹着生する。葉身は長さは最大 1m 程度。葉の形状が似た種にシマオオタニワタリ、ヤエヤマオオタニワタリがあるが、伊豆諸島に自生するのは本種のみである。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州、南西諸島（屋久島）；済州島、台湾、香港

【伊豆諸島における生育環境】

樹上に着生することが多いが、地上生のこともある。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

園芸目的の採取による影響に留意が必要である。一方、園芸的に栽培されている株が逸出している例もあると推定され、遺伝子汚染に注意する必要がある。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1970; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
5	3	0	2	4	2

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	8	0	0

判定基準

協議による



(執筆: 海老原淳)

ナンゴクホウビシダ

Asplenium cataractarum

チャセンシダ科

伊豆諸島

VU

環境省

【形態・生態】

常緑性シダ。根茎は長く這い、空中湿度の高い環境で崖または岩の上に生育する。葉身は長さ 10 ～ 20cm。よく似た種にホウビシダがあるが、本種は羽片の先端が鎌状に曲がり、孢子嚢群が辺縁に寄ってつく。

【分布の概要】

伊豆諸島、小笠原諸島、本州（紀伊半島）、四国、九州、南西諸島；台湾、中国

【伊豆諸島における生育環境】

暗く湿った岩の上に根茎を伸ばして着生する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

自生地は人為的影響を受けにくい場所が多いが、伐採の影響による乾燥化も脅威となり得る。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1970; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
1	0	0	1	1	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	1	0	1	0	0

判定基準

E+ACD



(執筆: 海老原淳)

ヒノキシダ

Asplenium prolongatum

チャセンシダ科

伊豆諸島

CR

環境省

【形態・生態】

常緑性シダ。根茎は短く、岩または樹上に着生し、葉の先端が長く伸びて無性芽をつける。葉身は長さ 10 ～ 20cm。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州、南西諸島；アジアの亜熱帯から温帯

【伊豆諸島における生育環境】

空中湿度の高い環境で、スダジイの樹上または岩上に着生することが報告されている。ただし伊豆諸島での自生地は局限され、個体数も少ないとされる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

葉の形が珍重されるため、園芸目的の採取が脅威となり得る。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1970; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
1	0	0	0	0	1

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

D



(執筆: 海老原淳)

クモノスシダ

※備考 (p. 213)

Asplenium ruprechtii

チャセンシダ科

伊豆諸島

CR

環境省

【形態・生態】

常緑性シダ。日当たりの良い林縁の岩上などに生育する。根茎は短い、葉の先端に生じる無性芽によって増殖し、群生することが多い。葉身は長さ 2 ～ 20(～ 28)cm。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州；東アジア

【伊豆諸島における生育環境】

不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

本種は、造成時に岩とともに別の場所から運ばれてきたと考えられる事例が知られている。自然分布であるかどうかは慎重に判断する必要がある。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1970; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

協議による



(執筆: 海老原淳)

コタニワタリ ※備考 (p. 213)

Asplenium scolopendrium

チャセンシダ科

伊豆諸島

CR

環境省

【形態・生態】

常緑性シダ。冷温帯で林床や林縁に生育する。根茎は短く、葉を叢生させる。葉身は長さ 12 ～ 50cm。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州；北半球の温帯

【伊豆諸島における生育環境】

暗い林下の岩の隙間に生育していたとされる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1960 年代に大島で採集された記録はあるが、それ以降の記録はない。現存するのであれば、分布の端に位置する重要な個体群となる。現地で詳細な調査を行う必要がある。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1970; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

協議による



(執筆: 海老原淳)

イワトラノオ

Asplenium tenuicaule

チャセンシダ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

常緑性シダ。根茎は短く、葉を叢生させる。岩上や石垣の隙間に着生する。葉身は長さ 2 ～ 15cm。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州；東アジア、南アジア

【伊豆諸島における生育環境】

不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

大島に分布するという情報はあるが、他種の誤認である可能性も含めて、分布を再確認する必要がある。

【関連文献】

岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

協議による



(執筆: 海老原淳)

オオバノヒノキシダ ※備考 (p. 213)

Asplenium trigonopterum

チャセンシダ科

伊豆諸島

CR

環境省

【形態・生態】

常緑性シダ。林床に生育し、根茎は短く、塊状になる。葉身は長さ 12 ～ 17cm。

【分布の概要】

伊豆諸島、小笠原諸島；台湾

【伊豆諸島における生育環境】

不明である。小笠原諸島では林床に生育する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

八丈島に分布するとの情報はあるが、分布を否定する見解もあり、他種の誤認である可能性も含めて、分布を再確認する必要がある。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1970; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	0	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

協議による



(執筆: 海老原淳)

アオガネシダ

Asplenium wilfordii

チャセンシダ科

伊豆諸島

CR

環境省

【形態・生態】

常緑性シダ。根茎は短く、樹上または岩上に生育する。葉身は長さ 10 ～ 35cm。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州、南西諸島；東アジア

【伊豆諸島における生育環境】

伊豆諸島では 1 箇所にわずかな個体数が生育していることが知られる。川沿いの空中湿度の高い環境で、樹上または岩上に生育していることが報告されている。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

全国的に見れば稀少な種ではないが、園芸目的や愛好家による採取に注意が必要である。伐採などによる周辺の乾燥化にも注意を要する。

【関連文献】

Jotani, Y. & H. Ohba, 1970; 岩槻邦男, 1992.

「現存する株数」別の情報数

～ 10	～ 50	～ 100	～ 1000	～ 10000	不明
0	1	0	0	0	0

「以前からの増減」別の情報数

～ 1/100	～ 1/10	～ 1/2	～ 1	～	絶滅および未発見
0	0	0	0	0	0

判定基準

D



(執筆: 海老原淳)